



京都市立美術工芸高等学校 卒業生インタビュー

平成19年卒業
金工職人

中根 嶺

「美術とは？美しさとは？ということに
向き合えたことが大きな学び」

素材との出会いと、彫刻という選択

左京区に工房兼店舗を構え主に金属を使って薬缶や鍋、照明器具、オブジェなど暮らしの道具や作品を作っています。

幼い頃からものを作ることが好きで漠然と機械科かデザイン科のある学校に行ければと考えていた時に美術工芸高校の存在を知りました。

入学前はデザイン専攻に入りたいと思っていましたが、それぞれの専攻を体験し、彫刻で触れることのできる素材（土、木、石膏、樹脂、石など）に興味をそそられて彫刻科を選択しました。

実際に授業の中で触れたそれらの素材は、硬いものでも道具の使い方を覚え適切に扱えば思いの外自由に造形ができたり、液体のように柔らかいものが硬くなって永く形を留めるものになったりと、技術を学ぶことやそれぞれの素材に親しむことの楽しさ、素材によって表現できることの違いなどを感じることができました。



進路への葛藤と、金工との出会い

在学時にものを作ることを生業にしたいという思いはより強くなり、大学に進学するのであれば職業につなげることを見据えた選択をしたいと考えましたが、当時はいろいろなことに関心があり一つに絞ることができずにいました。

当時父に相談してみましたがいずれの職業でも生計を立てるとなるとそれぞれに難しさがあると伝えられ、しばらく悩みましたが結局答えは出ず、そもそも自活することの大変さを知らないうちは選ぶこともできないという思いに至り、まずはそれを知るところから始めてみようという進学はせずに上京しアルバイトをしながら生活をすることにしました。

大きなモノづくりにも興味があったので舞台設営のアルバイトなどもしてみましたが、実際にやってみると規模が大きいと自分の担った役割はごく僅かであるように感じてしまい、自分には一人で持ち上げられるくらいのサイズ感のモノづくりの方が性に合っているなど感じるようになりました。そのような時にたまたま求人サイトでみつけた工房とご縁が金工を職業とするきっかけとなります。

その工房では日本の素材や技法をコンセプトにモノづくりをしているブランドで、鍛金技法のノウハウを一から教えていただき結婚指輪の制作やデザインに従事しました。約五年ほど勤め2014年に独立、それまで仕事としては指輪以外のものは作ったことがありませんでしたが独学で少しずつ作れるものを増やしながらかつ活動しています。大学で金工を学んだのですか？と聞かれますが、大学や専門学校に進学しなかった私にとっては美術工芸高校での学びが基礎となり今があります。



美術で問い続けること、そしてこれから

中学生の時はそれなりに絵が上手いような気がしていましたが、いざ高校に入学してみるともっと上手な同級生がいることや、同じ課題でも千差万別違った個性が表れることにたくさん刺激をもらいました。

美術とは？美術における評価とは？美しさとは何か？ということに向き会えたことがとても大きな学びとなりました。そのような授業があるわけではありませんが、先輩や同級生の作品を見たり、課題の制作に取り組む中で自然と自問自答する機会を得ることができました。

いまでは美しさに正解はなく技術の探究にも終わりはないように思っています。自分の中で満足して到達できたと思える境地もあるかもしれませんが、そう思えば幸せだと思いますが、一方で満たされてしまったら作家としての成長は止まってしまうような気がします。そのような思いで毎日昨日よりも上手により良いものを作ることができればと手を動かしています。

最近では初心に立ち返るようなつもりで金属だけでなく木彫にも取り組んだり、大きな意味でのものづくりとして森を開拓し創作のための場づくりに向けて動き始めています。

この文章を書きながら、叶わないのに今からもう一度美術工芸高校に通えるなら...と想像してしまいました。その選択肢のある中学生の皆さんが羨ましいなとも思います。

最後に彫刻の先生から高校生の時に教えてもらい今でも自分の座右の銘としている言葉を紹介합니다。「最近つまらないなと思っている時はその人自身がつまらない人間になっているとき」

毎日楽しく感じていられるように、能動的に、感受性を豊かに、日々を大切に過ごしていきたいです。